

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 131 号

平成 25 年 3 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より (10)

第 31 講 潔めらるること (4) 律法の廃棄

永遠の生命を目的として生きる人が信者

キリストに嫁いだ生活は、復活、永遠の生命の冠を目当てに歩いている生活であります。この世のものを目当てとして生活している人、これを未信者と言う。キリストが来給う時に、キリストと同じ光栄ある復活体を頂いて永遠不滅の天国において生きる、この永遠の生命を目的として生きている人、これを信者と言います。善行を含めてこの世のものを目的として歩いている人を未信者と言う。...

イエスは 30 歳まで大工をしておられました。これは、立派な家を建てることを目的としたのではなく、この世を終わったら父の許へ帰ることを目的として、大工の生活をしておられました。仕事は何でも宜しい、大工でも、学者でも、芸術家でも、会社員でも。この世の生活の目的は復活にある。永遠の生命にある。これをクリスチャン、これをキリストと再婚した人と言う。ここに、自由な生活、自由なる生命があり、何ものをも恐れない生活が展開してくる。人の顔色を恐れないような生活が生まれてきます。業績が上がろうが上がるまいが、急がない生活が出てくる。人が褒めようが褒めまいが誠心誠意やるという、本当の道徳が生まれてくる。人を相手としている間は、本当の仕事はできません。内村先生は、「この世のものを目当てとしている間は、“greatness” (偉大さ) と言うものは出てこない」と言われました。...

(P.262)

自分は罪人である

繰り返し申しますが、高円寺東教会に来て第1に学ぶことは、「自分は罪人である」ということ、これです。他人の目のちりをとる前に、自分の目の^{うつぱり} 梁をとる必要がある。自分の目の^{うつぱり} 梁が見えないことを罪と言う。信仰が少し分かせて頂いたら、自分の悪いことが分かってきます。何十年経っても自分は偉いと思っている人がいる。自分は信仰があると思っている。この高円寺東教会では、他人のことを言わずに、自分のことを言って下さい。この罪人たるの信仰が、キリスト教の99%と見て宜しい。これが分からなければキリスト教に真理は展開してきません。...

道徳は人間に道徳を行う力を与えない。それは、道徳的教養のある文明人が、現実にはかえって開発途上の地域の人々よりも不道徳であることを見ても分かります。律法、道徳は沈んでいる罪を浮き上がらせる役目をする。では、律法、道徳は罪であるのかと言うと、断じてそうではない。なぜなら、我々は律法、道徳によって自分が罪人であることを知る。これが基礎です。それによって救いが分かる。永遠不滅の生命が分かる。神から頂く賜物が分かり、理解することができる。この福音は、律法、道徳の上に立っている。律法、道徳は基礎です。その上に福音が立っている。ですから、律法、道徳によって、自分が罪人であることがはっきりと分からない間は、福音は分かりません。福音を知るためには、どうしても「自分は罪人だ」ということが分からなければならない。現代においてキリスト教の福音が分からないというのは、この律法、道徳と真剣に取り組んでいる人がいないという証拠であります。

(P.267)

私は、何というみじめな人間なのだろう

「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。」(ロマ書7章24-25節)

こうしたみじめな私を、私たちの主イエス・キリストが救って下さった。よって感謝すべきかな、と凱歌をあげられた。苦しみと嘆きの号泣をされると同時に、この死の体から自分を救って、善を行う力を与える、このイエス・キリストを発見する。これが贖いの信仰です。自分の間違い、過ち、無力、これらのすべてを赦して、すべてを十字架につけて帳消しにして、我らを神の子として、我らに永遠不滅の生命を与えて下さったという、イエス・キリストをパウロは信じた。そして、自分の罪に悩める号泣の中から、主は救い主なりという凱歌をあげています。イエス・キリストの十字架の贖いによって、神により義とされ、神の子とされ、自分はこの世の生活が終わったら天国へ帰って復活するのであると、パウロに復活という凱歌が上がってきた。

しかし、一方、現状をかえりみると、心は霊に満たされて神の律法に仕え、そして復活を喜んでいるけれども、肉ではやはり罪の支配を免れていないという現状の告白です。この告白を読んで、これはパウロ自身の告白ではなく、他人の、おそらく入信者のことを書いたのであろうと言う学者もいます。しかし、これはパウロ先生ご自身の経験に違いない。...カルビンや内村先生などは、ロマ書を書いたその当時の経験であると主張しておられます。内村先生は、「原語は動詞現在形である。文字の上から、書いた当時の経験に違いない。その上、私自身の経験をもってして、これはそうである」と言われました。...私も先生の御説に従いまして、これはパウロ先生のその当時の経験とします。その証拠に、パウロの晩年の、テモテに書いた手紙の中にも、「我は罪人のかしらなり」という述懐があります。...

(P.273)

律法の意義

本日の〔ロマ書7章14-25節の〕レッスンをかえりみまして、感想を三つ述べます。

第1に、我々は何十年経っても罪人でありますから、この贖いの信仰を繰り返し、繰り返し学ぶ必要があります。人間は死ぬまで罪人です。常に義とせられつつ、賜物として、神の恩恵により、イエス・キリストの贖いによって、我々は永遠の生命に至る。これは繰り返して言います。...

第2に、パウロ先生のような何千年に一人出るかという優れた人格者であっても、自分自身の力では善を行なうことができなかつた。いわんや我々は、イエス・キリストの御助けが必要です。うっかりしたら間違ふ。誤りを犯します。パウロ先生をもってしても、善を行わず悪を行ったと言う。いわんや我々は、気を許していたら、何をするかわかりません。死ぬまで警戒を要します。

第3は、ユダヤ人にとって律法と言ったら、モーセがシナイ山において十戒を神ご自身から受けて、イスラエル民族が、生命、至上のもの、神からの頂きものとして、大事にしていたものです。ところが、パウロ先生は、「律法は善を行う力を与えない。これは救いの条件ではない、いや、むしろ無用である」と言ったら、どんなに大変なことになるか。ですから、パウロの福音伝道の最大の敵は、他ならぬ同国人のユダヤ人であった。律法というものは、人に善行をなす力、十戒を実行する力を与えるものではなく、むしろ、十戒を真に行う力の無い、罪人であることを人に自覚させるために必要である。本当の力は神から頂いて初めて実行することができる。という律法の本当の意義を明らかにした。パウロは誠実と正直とをもって数十年間律法と取り組み、律法の意義を発見しました。これを人類に明らかにしたのは使徒パウロです。

諸君！ 我々もまた、我々に与えられた義務、与えられた仕事に対して、正直と誠実をもって取り組もうではないか。そして我々もまた分相応に真理を発見して、人類のために貢献しようではありませんか。

(P.275)

ロマ書 8 章は宝石のスパークリング・ポイント

ロマ章は丁度 16 章からなっておりますから、この 8 章は分量的に言ってもロマ書の中心で、また、内容の面から言っても、ロマ書の絶頂になっているわけであります。実に、この 8 章こそ、ロマ書の信仰の登りつめたところ、天にそびゆるところの部分であります。また、不思議なことに、ロマ書は大体新約聖書の中心に来ております。場所が中心であるのみならず、内容が新約聖書の中心になっている。ドイツ敬虔派のシュペーネル(注)は、新約聖書を一つの指輪に譬えると、ロマ書は宝石にあたり、そして第 8 章は宝石の輝く点、すなわち、そのスパークリング・ポイントである」と言いました。

(P.277)

注 シュペーネル(Philipp J. Spener)(1635-1705) ドイツのルッター派敬虔主義の指導者。

キリスト教の真理は、聖霊による

〔第8章〕第2段、5-11節。ここには、罪とその結果である死、滅びから免れることが書いてあります。...

キリスト教の信仰は神の霊、真理の御霊、聖霊による。信仰も、キリスト教の真理も、我々の努力奮闘、我々の求めることによって分かるのではなく、真理の御霊が我々に臨んで初めて分かる。これが、道徳と根本的に違う点であります。これは恵みです。これをパウロは「恵みによって救われる」と言いました。我々の努力、我々の行い、我々の信仰によらない。これは不思議です。我々は信仰を奇蹟と見ます。新約聖書を見ると、至るところに奇蹟のことが書いてある。我々の理性をもっては解釈できない。内村先生の言葉をもって言えば、「終生、聖霊は徐々に降る」。ですから、我々は忍耐をもって、この教えを聴く必要があります。徐々に降る聖霊によって、我々は罪より免れさせられるのです。神の賜物です。...

第3段、12-17節。神の子せられることが書いてあります。これも聖霊によってであります。もう8章は聖霊です。いよいよとなったら聖霊が出てくる。真理の御霊が出てくる。真理の御霊が出てくる。これが永遠不滅なるものです。賜物です。50年、70年で滅ぶべき肉体の内に聖霊が臨むことによって、われわれは復活する者となる。内村先生の言葉によれば「これは復活の種子なり」、種子とは霊です。その霊を受けている人、それを信者という。

第4段、18-30節。ここでは、神の子であるから、今度は世継ぎとせられることが書いてあります。これが復活です。これが聖書の中心問題です。ただ神の子にせられたのではない。神の子にせられた実物を頂く。子供は親の財産をもらいます。神の子は神の財産をもらう者です。神の子と言え、ただ漠然としたものではない。実物が与えられる。それは、キリスト来給うて再臨されたときに実現されます。改造された新しき宇宙の、全世界万物の主人公となること、これを世継ぎとなると言うのです。「人の抱くことができる思想にしてこれ以上の思想はない」と内村先生は言われました。聖書には、目未だ見ず、耳未だ聞かざるの賜物が我々を待っていると書かれてい

ます。...

(P.279)

この時の苦しみは、栄光に比べると言うに足りない

この 8 章を大観しまして、私が最も感銘を受けました文字は、第 18 節「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」。私はこの言葉によって、8 章全体の精神が浮き彫りにされているように思う。我々はキリスト来給う時に復活して、キリストが長兄となると書いてある。我々は弟妹、共同相続人だと書いてあります。パウロは、「イエス・キリストと我々は栄光を共にする。この世で何をした、この世でどんなことをした、この世で苦しんだ、この世で悩み悲しんだ、この世で喜んだ、満足した、そんなものは言うに足りない。その栄光ある復活のときの完成された宇宙と比べると、すなわち、我々に現れんとする栄光に比べたら、この世のものは言うに足りない」と言っています。

我々は、この深き救いを、聖霊が臨む時に分かってくる。パウロは「我見るところおぼろなり」と言いました。おぼろげではありませんが、見えてくる。パウロはその栄光を見た。そして、その望みがあるが故に、前人未踏の活躍ができたのであります。このように、この世にまったく関係のないような永遠無限の栄光が我々に臨んだとき、この世に対して力が出てくる。...

イエスが十字架にかけられた時、11 人の弟子は皆逃げました。その逃げた弟子達に、イエス再臨の時に与えられる復活の望みが臨んだ時、今度は殺されても自分はこの福音を述べるという力が出て来た。死を恐れない力が出て来た。これがキリスト教の始めです。キリスト教の 99.9999 パーセントは、この復活体を頂く、永遠無限の栄光を我々が継ぐ、ということです。このことを目当てに歩いている者、それを信者と言います。この世のものを目当てに歩いている者、これを未信者と言う。ここではそれを、霊の人、肉の人と書いています。要するに我々が聖霊を受け取るか、受け取らないかは、来世、永遠不滅の我々の栄光のために生きているか、この世のことで生きているかによって決まる。

(P.281)

ふたたび、聖霊について

聖霊、父なる神の霊、イエス・キリストの霊が我々に臨んだとき、我々は永遠に生きる者となる。肉体は滅んで、肉体の死は味わうけれども、天国へ行き、キリスト再臨の時に復活する。霊と言うのは永遠の生命のことであり、イエス・キリストがお持ちになった生命であります。それを我々普通の人がもらえるということがキリスト教の救いです。これは、8章を読めばはっきりしてきます。8章には驚くべきことが書いてある。8章に入ってくると聖霊の助けがなければ分からなくなってきました。聖霊が臨んで初めて明らかになる。

内村先生は「聖霊は徐々に降る」と言われました。先生は、50歳を過ぎて一人娘のルツ子さんを亡くされた時、霊の降臨を豊かに受けられた。その時以来、先生の信仰に筋金が入りました。先生は50歳にして、この8章がはっきり分かったのです。

我々は、あせらず、ゆっくりと、この箇所を学んで行きたいと思えます。かつてフィリップ・ブルックスと言う人が「地球を垂直に掘って往ったら、どの点から掘ったとしても地球の中心に達する」と言ったそうではありますが、これとおなじように、8章の1-11節のどの節でも分かったならば、パウロの中心点に達すると内村先生は言われた。このことは8章全体、ひいては聖書全体について言えます。問題の中心は、イエス・キリストの復活、永遠の生命にあります。

(P.290)

聖霊は徐々に降る

「もし、イエスを死人の中からよみがえらせられたかたの御霊が、あなたがたのうちに宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせた方は、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなた方の死ぬべきからだをも、生かして下さいであろう。」

(ロマ書 8 章 11 節)

父の霊が我々の内にある、すなわち、キリストの霊が我々の内にあるということは、我々が神の子とされて、永遠の生命を頂いて、イエス再臨のときに復活する望みが我々に与えられているということでもあります。この我々の復活の望みにより、神は我々を死ぬべき身体をもイエスの再臨の時に復活させて下さるであろう、とパウロは言っている。我々も復活させてもらうという望みが、我々の肉欲をコントロールするのであります。「霊によって歩む」、「キリスト我が内にあり」ということは、我々が復活させてもらうことを目当てとして生きていることです。この復活の望みによって歩む時に、我々は霊によって歩むと言うのであります。これによって律法によってなしえなかったことをなし得る。これがキリスト者の生活でありまして、無理なく、有効に自己を制御し、自己に克ち、世に勝つことができる。ここに信者の特色があります。キリスト教では、特別な潔さを要求してはおりません。イエスは大工であられました。独身者、隠遁生活、献身者として伝道師となることは、要求されておられません。

内村先生は、「聖霊というものは終生徐々に降る」と言われました。ダマスコ途上のパウロのごとく、また、ペンテコステにおけるように、神の目的によって特別に聖霊が降る場合もありますが、普通は徐々に降る。我々の善行、聖霊による行いは、我々に頂いた分相應にやれば宜しい。自分の善行、自分の禁欲生活を自負するようであったら、キリスト教をやめた方が宜しい！ 諸君、急ぐ必要はありません。聖霊によって歩むということは、決して難しいことではありません。

(P.297)

悲しみ、苦しみに打ち克つ力

「わたしは思う。今のこのときの苦しきは、やがてわたしたちに
現わされようとする栄光に比べると、言うに足りない。」

(ロマ書 8 章 18 節)

これ〔8 章 18 節〕がロマ書全体を表わす重大な節であることは、すでに、8 章の大意の所で申し上げました。私は、もし 8 章の中で 1 節をとれと言われたならば、この節をとります。この言葉が本当に分かれば、この世の苦しみ、悲しみを乗り越える力が与えられます。悲しみ、苦しみのある方は、この節をよく読んで下さい。この 18 節は、キリスト教全体を表しており、19, 20 節を引き出す言葉となっています。我々の未来は無限の栄光に満ちている。しかし、現実を見ると悲しみや苦しみに満ちている。それはなぜか、人間が不完全であるからであります。現実の状態と未来の栄光は裏表になっています。そうですから、この世の苦しみ、悲しみは辛いけれども、恐るるに足りない。...

諸君、この希望を持とうではありませんか。時来たらば、イエス・キリストの贖いによる永遠不滅の栄光が与えられることを信じて、この世の苦しみや悲しみと取り組もうではありませんか。これが分からないのは、現在苦しみが無いからであります。苦しみ、悲しみがあれば、それがだんだん分かって来ます。これを迷信なりと嘲る人は、苦しみのない人であります。我々は、イエスは救い主であると信じて、主の名を呼びつつ、いかなる苦しみ、悲しみにも耐えつつ、自分に与えられた務めをなそうではありませんか。

(P.305 - 309)